

# SHOW HEY シネマール

★★★

## マリー・アントワネットに別れをつけて

2012年・フランス、スペイン映画  
配給/ギャガ100分

2012 (平成24) 年 10月 25日鑑賞

GAGA試写室

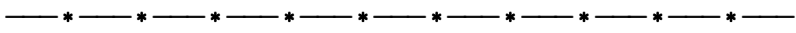
### Data

監督・脚本：ブノワ・ジャコー  
原作：シャンタル・トマ『王妃に別れをつけて』（白水社刊）  
出演：レア・セドゥ/ダイアン・クルーガー/ヴィルジニー・ルドワイヤン/グザヴィエ・ボエヴォワ/ノエミール・ボフスキー/ミシェル・ロバン

## 👁️👁️ みどころ

「マリー・アントワネットもの」は面白い。それは、あの激動の時代における人間ドラマだから当然。さらに、マリー・アントワネットを朗読系の侍女の視点から観察。すると、そこに見えてくるベルサイユ宮殿内部の人間模様は？ またポリニャック侯爵夫人との愛人(?) 模様は？ そう期待したが、さてその実態は？

こんな映画に、ヒネリ、伏線、どんでん返しを期待するのは無理かもしれないが、それにしても・・・。



## ■□「マリー・アントワネットもの」は必見！ そう思ったが■□

1789年7月14日バスチーユ陥落のニュースがヴェルサイユ宮殿を駆け巡った。プレスシートには、あの時代の小説を書かせては第一人者である作家、藤本ひとみ氏の「マリー・アントワネットについて」と、東北大学教授・フランス社会経済史の小田中直樹氏の「フランスが激動した時代に」という2つのコラムがあり、それぞれ読みごたえがある。とにかく、あの激動の時代の人間ドラマは面白い。それが私の持論だったし、本作が描くマリー・アントワネットの朗読系の侍女の目から見た女王とヴェルサイユ宮殿の人々との人間模様や、マリー・アントワネットとガブリエル・ド・ポリニャック侯爵夫人（ヴィルジニー・ルドワイヤン）との愛人模様(?) は面白そう。そこにはきっと、かつての人気テレビドラマ『家政婦は見た!』や松嶋菜々子主演で近時脅威的視聴率を誇った『家政婦のミタ』と同じような、覗き見趣味の楽しさがあるはずだ。

さらに、マリー・アントワネットに気に入られていた朗読系の侍女が、その女王からある過酷な命令を受け、それにどう対応するのかというメインストーリーも面白そう。その

うえ、マリー・アントワネットは、私の大好きな美人女優ダイアン・クルーガーが演ずるとなると、こりゃ必見！そう思ったが・・・。

## ■□■朗読系の侍女の視点は面白そうだが・・・■□■

本作の主演は朗読系の侍女シドニー・ラポルド。ラポルドを演じるのはウディ・アレン監督の『ミッドナイト・イン・パリ』(11年)で、ちょっとした存在感を見せつけた若手美人女優のレア・セドゥだ(『シネマルーム28』25頁参照)。原作ではラポルドはもっと年上らしいが、ブノワ・ジャコー監督はあえてラポルドの年齢を若く設定することによって、マリー・アントワネットとの「危うい関係」を浮かび上がらせようとした。

冒頭からラストまで出ずっぱりとなるラポルドは、身寄りのない孤児ながら次第にマリー・アントワネットのお気に入りとなり、最後には過酷な命令を受け、戸惑う姿を懸命に演じているが・・・。

## ■□■「実況中継」がないと、映像的には・・・■□■

以上のように本作の見どころはそれなりに面白そうで魅力的だが、いかんせんバスチーユ陥落の状況や286名の名前の載ったギロチンリストの状況などがヴェルサイユ宮殿内部に伝えられるニュースとして語られるだけで、その「実況中継」が全くないため、映像的な迫力がない。つまり、本作はポリニャック侯爵夫人を含む3人の女主人公たちと、それを取り持つカンパン夫人(ノエミ・ルボフスキー)たちの語りだけで構成されているわけだ。

もっとも睡眠薬を飲んでベッドで眠りこけている裸のポリニャック侯爵夫人を見せてくれたり、ヴェルサイユから脱出するポリニャック侯爵夫人の身代わりになるためにドレスを脱ぎ、素裸になるラポルドの姿を一瞬見せてくれるなどの映像上のサービスはあるが、それだけではちょっと・・・。

## ■□■ヒネリは？伏線は？どんでん返しは？■□■

ドキュメンタリーや実在の人物をテーマにした映画は基本的に事実に即して描くことが要求されるから、そこにヒネリや伏線そしてどんでん返しを期待するのはムリ。しかし、オリジナル脚本でエンタメ映画をつくらうとすれば、それらがちりばめられていることが観客を満足させるために不可欠。たとえば、ウディ・アレン監督作品の多くが人気を得ているのはそのためだ。マリー・アントワネットを中心とし、ラポルドとの「危うい関係」とポリニャック侯爵夫人との「歪んだ関係」を描き出す本作では、マリー・アントワネットがヴェルサイユ宮殿を夫と共に脱出していくポリニャック侯爵夫人をなお守ろうとするのか、それとも見放すのか、が最大のポイントになる。そこで下されたマリー・アントワネットの決断はポリニャック侯爵夫人に甘くラポルドに厳しいものだったから、ラストに向けてのさらなる注目点は、ラポルドがその指示(命令?)に従うのか否かということになる。そこでポリニャック侯爵夫人の緑色のドレスに着替えるため、ラポルドが一瞬オー

ルヌードになるというお楽しみのシーンが登場するわけだが、それはスケベおやじの視点にすぎず、本作のポイントはまさにここにおけるラボルドの決断だ。

マリー・アントワネットを恋のターゲットとして捉えることができないのは当然だが、ラボルドはマリー・アントワネットに対して、畏敬、あこがれ等々の念だけでなく、愛情めいた気持を持っていたはずだ。それは、マリー・アントワネットが公然とポリニャック侯爵夫人と額と額を合わせ、肩を抱き合って部屋に向かう姿を呆然と見つめるラボルドの視線によっても明らかだ。ここでラボルドのその決断をあっさり書くわけにはいかないから、それはあなた自身の目で確認してもらいたいが、さてそこでのヒネリは？伏線は？どんでん返しは？

2012（平成24）年10月26日記